

## 黙示録15章「極まる御怒り」

### 1A 打ち勝った人々の歌 1-4

#### 1B 最後の七つの災い 1

#### 2B モーセと小羊の歌 2-4

### 2A 聖所からの御使い 5-8

#### 1B 清い光り輝く姿 5-6

#### 2B 栄光と大能の煙 7-8

## 本文

黙示録 15 章を開いてください。私たちは、13 章において獣による国が地上に立てられるところを見ました。キリストの御国を阻むべく、獣、すなわち反キリストが悪魔の力と権威、位を帯びて世界を支配します。そこで、イエス様の名を守ろうとする者は、もう一匹の獣、すなわち偽預言者によって殺されていきます。獣を拝まないからです。また偽預言者は獣の像を造り、それを拝ませます。さらに、獣の数字を全ての住民の右の手か額に刻印として受けさせます。

しかし 14 章は、これらの悪の勢力に全く潰されていない、無傷である、神のしもべ十四万四千人の姿を見ました。小羊と呼ばれるイエス様が、シオンの山の上に立っておられます。再臨して御国を確立された姿です。そこに天も降りてきています。イエス様のおられるところに天もあります。そしてその中で、十四万四千人が新しい歌を歌っていました。彼らが贖われる者たちの初穂です。私たちは、どんなに暗闇が増し加わろうとしても、光が打ち勝つことを知っています。そして主は三人の御使いによって宣言を行わせました。初めの御使いは、永遠の福音を携えていました。天地、海にある源である創造者をあがめなさいというものです。第二の御使いはバビロンの崩壊、第三の御使いは、獣の国とその住民、その像を拝み、刻印を受けた者に対して永遠の火の中で苦しむことを宣言しています。そして主が世界に戻って来られる幻が 14 節からありました。それは収穫をすることとして描かれていました。収穫の穂が乾いてしまうほど、その時が満ちていました。それは、主が忍耐して悔い改めるのを待っていたが、今やその悪の仕業が明らかにされている中で、悪を行なう者どもを刈り取る幻です。さらに、ぶどうを酒ぶねで踏みつける幻に移っています。そこから流れ出るぶどう汁は、世界の軍隊がキリストに対して反抗して戦っていく中で、キリストご自身が戦われて、倒され流される血であります。

獣が聖徒たちに打ち勝ったようであり、実は全く打ち勝っていなかった。打ち勝っているようであり、実は滅びが定められている姿を見ることができました。そして 15 章ですが、ついに最後の災いに入ります。

## 1A 打ち勝った人々の歌 1-4

### 1B 最後の七つの災い 1

1 また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。神の激しい怒りはここに窮まるのである。

「もう一つの巨大な驚くべきしるし」です。12 章に巨大な驚くべき徴として、ヨハネは、太陽と十二の星を着ていた女を見ました。また、七つの頭と十本の角を持つ赤い竜も見ました。そして、ここでもう一つの巨大な驚くべきしるしです。

それが、「七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。」ということであります。これまで私たちは神と小羊から来る災いを見てきました。第七の御使いがラツパを吹き鳴らした時のことを思い出してください、11 章 15 節からです。天において大きな声々が聞こえて、この世の国が私たちの主、およびそのキリストのものとなったと叫びました。そして、二十四人の長老が神の怒りの日が来たと、神を礼拝しつつ言っています。それから 11 章 19 節にこうあります。「それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。」ここに 15 章がつながります。神殿が開かれて、契約の箱までが見えているのですが、15 章 5 節以降に、聖所から出て来る七人の御使いの姿があります。そして彼らが、一人一人、神の怒りの極みである鉢を投げつけます。つまり 12 章から 14 章までは、第七のラツパが吹き鳴らされて、最後の七つの災害が地上に下るに当たって、大患難において起こる出来事を挿入しているということです。災いを下す幻から少し離れて、特に獣が地上に現れて、国を造るという出来事を示さねばなりません。覚えていませんか、大きな強い御使いがヨハネに対して、開かれた巻き物を食べさせて、もう一度、預言しなければいけないといいましたね(10:11)。主が預言者たちに語っておられたことが、まだまだたくさんあったのです。それで 12 章から 14 章までに、主はヨハネに数々の幻をお見せになりました。

そして、この最後の七つの災害によって、「神の激しい怒りはここに窮まる」とあります。この「極まる」はギリシヤ語で「テレオウ」です。イエス様が十字架に付けられて死なれる直前の発せられた言葉、「完了した(ヨハネ 19:30)」はテレスタイであります。主が、十字架の上で贖いを完全に行われました。同じように、神が地上に対する裁きを完了して下さいます。主は、どんな罪も、人の子を冒瀆する罪でさえ赦されると言われていました。私たちが、この罪だけは赦されないと言われても、主は赦されます。贖いは完全なものだからです。神の、罪に対する御怒りはそこで満たされました。「この方こそ、私たちの罪のための、—私たちの罪だけでなく全世界のための、—なだめの供え物なのです。(1ヨハネ 2:2)」しかし、もしその宥めの供え物を拒んだらどうなるでしょうか？最後の、完成した、罪のための供え物なのですから、その後は残されておらず、ただ神の御怒りを待つしかありません。「まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。私たちは、『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。』、また、『主がその民をさばかれる。』と言われ

る方を知っています。生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 10:29-31)「赦されない罪とは、罪を全て赦す供え物を拒む罪であります。

## 2B モーセと小羊の歌 2-4

2 私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。

ヨハネが見ている場所は、「ガラスの海のようなもの」です。これは、神の御座の前に広がっている海のようなところです。「4:6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。」私たちは黙示録で、地上でどんなに災いが下っても、また地上でどんなに悪がはびこっても、全く揺るがされることのない天の幻も戻されますね。ここもそうです。「ガラスの海」というのは、元々は、王座の前に広がっている部分で、その威光と力を示している部分で、ガラスになっているのは、神にはしみも汚れもない方であることを示しています。けれども今、「火の混じった」ガラスの海だとしています。これは、地上に神の御怒りの火が下っているの、その火が反射されて光っているのです。

そこに、「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々」がいます！13章、そして14章において、イエスに対する信仰を持っていた人々です。彼らはその信仰のゆえに、獣を拝むこと、その名前前の刻印を押されることを拒みました。それで殺されています。13章には、「彼(獣)はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許された。(7節)」とありました。地上において、獣が打ち勝っているようにされていたのですが、実は天があり、天において彼らは勝利していたのです。イエス様が言われましたね、「ルカ 12:4-5 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」私たちは、今のところ、この日本で信仰のゆえに殺されるということはありませんが、けれども、人を恐れるという内なる戦いがあります。しかし、人にとっては敗北のようであっても、神にあっては勝利者なのです。何が勝利であるかは、12章11節に天での声として書き留められています。「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。」私たちの勝利は、自分の罪が小羊の血によって洗い清められたことです。そして、この方が自分の主であり救い主であるという証しであります。

そして、彼らが「神の立琴を手にして」います。黙示録5章において、四つの生き物と二十四人の長老が、「立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した」とあります(8節)。その御前にいる天の存在が立琴を持っているように、今、獣の国から救い出された者たちが持っています。14章においても、十四万四千人が新しい歌をうたっている中で、天からの声は、

「立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった(14:2)」ともあります。前にも話したように、ダビデは立琴を奏でて主に歌い、また神殿において立琴を奏でる者たちを奉仕に着かせました(例:1歴代 25:1)。詩篇には、数多くの立琴による賛美を記しています。「神よ。あなたに、私は新しい歌を歌い、十弦の琴をもってあなたに、ほめ歌を歌います。(144:9)」それは、天における奏樂を表しているからです。

そして、「このガラスの海のほとりに立っていた」と言っています。なぜ海の辺(ほとり)なのか？その答えが3節に載っています。

3a 彼らは、神のしもべモーセの歌と小羊の歌とを歌って言った。

彼らは、モーセの歌を歌っていたのです。彼らが小羊の血によって贖われたのですから、小羊の歌をうたっているのですが、モーセの歌も歌っているのです。モーセの歌と言えば、思い出すのは出エジプト記15章です。主が、イスラエルの民をエジプトから連れ出してくださいました。十の災いを主は下されました。そしてパロは、強制的に彼らをエジプトから出させましたが、その後で、彼らを追いかけたのです。民は紅海のほとりに宿営しました。その所に、エジプトの精鋭部隊がやって来ました。しかしモーセが杖を海に向かってあげると、東からの風が吹いて、海を分けました。そこをイスラエルの民が歩き、エジプトの戦車は追いかけていきましたが、民が全て渡り終わってそして、モーセが海に手を差し伸べます。すると、海が戻りました。そして、イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見たのです。その後、モーセとイスラエル人が歌を歌いました。「15:1-2 主に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を取められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」

つまりイスラエルが、エジプトを神が裁かれることによって救われました。紅海のほとりで、神の裁きを目の当たりにしました。同じように、今、地上において獣の国を神が裁かれているのを、これら信仰のゆえに殉教した者たちが見ています。そして、そのガラスの海のほとりで、その裁かれている姿を見ているのです。ですから、彼らは小羊によって救われているのですが、出エジプトがその救いを表しているものとして、モーセの歌も加えられているのです。

3b「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。もろもろの民の王よ。

彼らの歌の内容ですが、初めに神の力を歌っています。「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです」とあります。詩篇には、「145:5-6 私は栄光輝くあなたの主権と、あなたの奇しいわざに思いを潜めます。人々はあなたの恐ろしいみわざの力を語り、私はあなたの偉大さを述べるで

しょう。」私たちは、神の造られた天地にある力、その偉大さに圧倒されます。日本に住んでいますと、自然というのは美しいものという一種の優しさがありますが、とても陰しく、恐れさえ抱かせるものであることが分かります。雷や稲妻を見る時にそれを感じますね。そして、私たちは人体を見る時に、神の驚くべき業を見ます。「139:13-15 それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。」

そして、ここ黙示録 15 章では具体的には、主がその偉大な力をもって、獣の国に対して容赦ない裁きを加えられるところにある偉大な力ということになります。「詩篇 66:3 あなたのみわざは、なんと恐ろしいことでしょう。偉大な御力のために、あなたの敵は、御前にへつらい服します。」私たちは、この世にある力にあまりにも圧倒されて押しつぶされてしまう気持ちになるかもしれません。けれども、主はその力よりも、はるかに圧倒的な力でそれらの敵を押しつぶしてしまわれます。この神が私たちの味方なのですね。「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:37)」

そして、彼らが次にほめたたえているのは、神の道です。「あなたの道は正しく、真実です。」万物の支配者であられる神、圧倒的な偉大な力を持っておられる神は、その道が正しく、真実なのです。16 章にも、天から「あなたは正しい方です。」「あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」という声があります。バビロンが滅んだ後も、天で大歓声があり、「19:1-2 ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。」とあります。天において、神の裁きがことごとく正しい、真実であると彼らは歌っているのです。私たちは、ここで神の裁きについての思いを変えないといけません。それは、神の裁きが語られる時にそれがいかにも厳しくて、恐ろしいというだけで、その根底には、もして「神は酷い方なのではないか」という思いさえ出て来るからです。なぜ、神はこのように裁かれるのか？という疑問の背後には、「神がこのように裁かれるのは、正しくないのではないか？」という疑問が出て来ます。

例えば、私たちは福音を聞いても拒む者たちが、神に怒りの中に入ると聞いています。これだけ良いことをした人なのに、という思いが出て来るかもしれません。そして福音を聞かないままで死んでいった人々はどうなるのか？という疑問も浮かぶでしょう。しかし天に行けば、必ず、「主よ、あなたはこのように真実で、正しいのですね」と完全に納得、理解、そして賞賛できる知識をいただけるはずで、ですから、私たちはこの不条理や不正に満ちた社会の中に生きていても、希望を失わずに済むことが出来ます。そして、信仰者が酷い仕打ちを受けていたとしても、主は必ず正しく報いてくださる方であると知っているのも、悲しみながらも喜ぶことができます。

そして、「もろもろの民の王よ」とあります。そうです、一部の者たちだけでなく、全ての国民が主

を自分の王としてひれ伏す時が来ます。そこで次の歌になります。

4 主よ。だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。

すべての国々の民が来て、礼拝します。まず、「だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか」と言っています。私たちに必要なのは、主の御名のみです。この方の名によって、私たちは救われます。ペテロが、ユダヤ人たちの前で証言しました。「使徒 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」そして、かの日には、彼らが歌っているように、全ての者が確かに主の御名をあがめます。「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリピ 2:10-11)」今、生きているうちにこの方を主とする人もいますし、生きているうちに拒んでも、将来、正しい神の前に立って、この方がすべての主であることを告白せざるを得ません。そして私たちは、日々の生活の中でも、いろいろな問題が起こっても、この方の御名を呼び求めます。

そして、主のみが、「聖なる方」です。私たちは汚れているけれども、欠陥や傷があるけれども、主はそうしたものからかけ離れた方、一点の汚点もない方です。ゆえに私たちはこの方に拠り頼むことができます。この方のみが私たちを正すことができます。

そして、「すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。」と歌っています。一部の民ではなく、全ての国々です。これは、聖書の初めから終わりまで一貫して強調されていること、全ての国民が主の前にひれ伏します。今、私たちは福音が世界に宣べ伝えられているのを見ます。そして最後には、国々が主イエスの前に連れてこられ、羊と山羊を選び分けるように選り分けられ、正しい者は御国に入ります。そして、事実、キリストが王となり、この方のもとに国々の民がやって来て、ひれ伏すのです。「詩篇 22:25-28 大会衆の中での私の賛美はあなたから出たものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、主を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。地の果て果てもみな、思い起こし、主に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。まことに、王権は主のもの。主は、国々を統べ治めておられる。」今、私たちは世界中で、主イエスの御名をあがめる兄弟姉妹がいます。私たちが日本にいとなく、神の国は日本人のもの、また宣教師として来ているアメリカ人や韓国人のものだけに考えてしまいます。けれども、世界のあらゆる民族と国民に広がっているのです。そして、終わりの日、キリストがエルサレムで王となられる時には、あらゆる諸国がこの方を拝みにやってくるのです。「ゼカリヤ 14:16 エルサレムに攻めて

来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。」

「あなたの正しいさばきが、明らかにされたから」というのが理由です。神がキリストによって示された正しい裁きは、全ての人を礼拝させます。福音は、全ての人を平等にします。福音にあって、神の裁きを見る時に、全ての人々が納得し、この方はあがめるにふさわしい方だと悟ります。文化や歴史、哲学や思想、生い立ちや血筋、経済的な格差、全てを超えて、この方は正しい、公正な裁きを持っておられるのです。

## **2A 聖所からの御使い 5-8**

### **1B 清い光り輝く姿 5-6**

5 その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。6 そしてその聖所から、七つの災害を携えた七人の御使いが出て来た。彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。

ここは、ちょうどラツパによる七つの災害の時にも似たようなことが起こりました。「8:2-5 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラツパが与えられた。また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに入った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。」第七のラツパが吹き鳴らされて、それで七人の御使いが同じように立っています。地上にある幕屋や神殿は、天にある実体の模型であり、影であることを、私たちはヘブル書から知っていますし、この8章の学びの時に学びました。ただここでは違う点があります。第七の封印が解かれた時、これらの御使いは御座の前に立っているだけです。けれども、この第七のラツパが吹き鳴らされた後に、七人の御使いは聖所そのものから出てきています。11章の最後には、契約の箱が見えるほどですから、至聖所のところから出てきているような形になっています。主の聖なるご臨在と栄光から、直接、これらの災いが下るのです。

そして、「彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。」とあります。まるでイエス様ご自身であるかのような輝きです。「1:13 それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。」神のすぐそばにいたために、主の栄光と聖さ、その力が反映して輝いているのです。亜麻布は、祭司の装束、神と人との仲介者としての働きを示しています。金の帯は、キリストの栄光を持つ使者としての働きを示しています。

## 2B 栄光と大能の煙 7-8

7 また、四つの生き物の一つが、永遠に生きておられる神の御怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使いに渡した。

神の御座のところには、四つの生き物がいます。その一つから、金の鉢を受け取ります。それは先の 8 章と同じく、香を焚くところの金の鉢のことでしょう。聖徒の祈りがその煙の中に現れていることが、5 章に書かれていました。そして、それは、「永遠に生きておられる神の御怒りの満ちた」ものであるとあります。神の御怒り、しかも永遠の神の御怒りです。既に 14 章でそれがどういふことなのかを読みました。「10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。」

8 聖所は神の栄光と神の大能から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその聖所に、はいることができなかった。

聖所が煙で満たされているということですが、それは神の栄光と大能のゆえであるとあります。地上の幕屋でこのことが起こりましたね。民が荒野で幕屋の用具を造りました。最後に、モーセが組み立てました。「出エジプト 40:34-35 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」そしてソロモンが神殿を建てた時も同じです。「1列王 8:10-11 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」主の栄光を前にしては、だれもそこに立ち入ることができない状態です。

つまり、16 章から見る七つの災いは、神の聖さ、正しさ、栄光と力を表すものだという事です。それは単に苦痛を表すものではなく、私たちはただ神を恐れかしこみ、この方のさばきに触れ伏すような、そこには聖さ、正しさがあります。私たちの生きている世は、人間の正しさが、自分の正しさが主張されているところです。しかし、主を恐れかしこみながら、正しく歩むことを覚えたいものです。「1ペテロ 1:17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。」